

## 17世紀中葉の英国における女性の説教-教えること- とコスモロジーの攪乱：女性説教者批判パンフレッ トを中心に

野々村， 淑子

九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：助教授：教育文化史・教育関係史

<https://doi.org/10.15017/10528>

---

出版情報：大学院教育学研究紀要. 9, pp.1-17, 2007-03-26. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部  
門

バージョン：

権利関係：

## 17世紀中葉の英国における女性の説教-教えること-とコスモロジーの攪乱

—女性説教者批判パンフレットを中心に—

野々村 淑 子

### はじめに

本稿は、17世紀半ばのイングランドに出現した説教者の女性たちをめぐる当時の人々の感覚や世界観、コスモロジーの一端を明らかにするものである。神と人間の関係が問われつつあった近代初期において、女性が人々を導く霊性（スピリチュアリティ）に近い存在として、宗教教育の役割を期待され始めていたことは従来指摘されてきている<sup>(1)</sup>。女性が教えるという行為に近づいていく、あるいは期待されていく一つの転換点がこの時代にあると、ひとまずいうことができる。

ただし、17世紀半ばというイングランド史における混乱期（空位期<sup>(2)</sup>）において、革新派セクトの野心や希望を背負いつつ、神からの言葉を人々に伝えた女性たちが、聖書を教えるに相応しい敬虔な女性像へとそのまま重なるわけではない。騒乱期において沸き上がったセクト活動の担い手として女性説教者が顕在化したのは、一時的なものであった。その上、彼女たちは、敬虔な女性としてのイメージで語られることは殆ど無いからである。

出版規制の弛緩のなかで大量に出回ったパンフレット群には、男性セクタリアンと共に、同じようにセクトで活躍した女性説教者も、多くの言葉を残している。そして、この自由な言論空間に参入した女性たち（説教者ではない女性たちも含む）に対する非難や抗議、戒めの言葉も数多く出版された。それらは、男性の世界に女性が参加するという事態のみへの反論ではない。本論で明らかとされるように、17世紀の人々の生を支配していた霊性をめぐる感覚や態度、経験、そして世界観からの、女性が説教をするということについての解釈であり、意見や論評なのである。

説教や預言を行った女性たち自身の経験、それを支えた信念体系については別に論じる必要がある。しかし、ここではまず、氾濫したパンフレット群のなかから、女性説教者の活動を直接的に論じたものに注目し、その世界観の再現につとめ、近代初期英国における女性と教えることをめぐる関係、そしてその根底にあったコスモロジーのゆらぎを明らかにしたい。

### 1. 「ひっくり返った世界」の女性説教者とコスモロジー

1640年から1660年のイングランドは、1649年の国王チャールズ一世処刑とクロムウェルによるプロテクター政権樹立に象徴されるように、教会や国家、社会を支える秩序そのものが大きく揺るが

された時期である。ロンドンを中心とするハイウェイ<sup>(3)</sup>を通じた人々や情報の頻繁な往来のなかで、「ひっくり返った世界」<sup>(4)</sup>という言葉に表わされているように、国王だけではなく、教会での説教を司る聖職者、奉公人や徒弟を抱える主人や親方など、さまざまな上位の権威が、転覆され得るものであるという世界観が、人々を動かし始めていた。このような世界観を支えていたのは、終末の時とその後のイエスの王国の樹立を待ち望む千年王国思想であった。現在の苦難の世界が神によって滅ぼされ、王イエスによって統治される千年間の至福の時が来るという思想である<sup>(5)</sup>。

おりしも、出版統制機関であった星室庁裁判所が1641年に廃止されたことは、この時期の多種多様な政治的、社会的なプロパガンダや誹謗中傷などを含むパンフレット類の氾濫を引き起こした。千年王国思想に裏打ちされた多くのセクト活動がかつてない活発な動きをみせたのは、自由かつ重層的な言論空間が、それを生み出し持続させていくだけのエネルギーを有していたからであるといわれている<sup>(6)</sup>。

さまざまなセクトにおいて、あるいはセクト間を移動しながら平信徒たちが説教活動を行い、「職人説教師 (Mechanike preachers)」「桶-説教者 (tub-preachers)」との揶揄、攻撃を浴びながら、人々の支持を得ていた。長老派聖職者からの猛烈な批判のなかで、それぞれのセクトの思想をつくりあげ、それを実現しようとした彼らの活動とその歴史的意義に関しては、クリストファー・ヒルの研究<sup>(7)</sup>に詳しい。

興味深いことに、そのようなセクトにおいて、少なからず女性が存在していたのである。なかでもクエーカー教団においてマーガレット・フェルやエリザベス・フートン等多数の女性が、英国圏あるいは国境を越え宣教活動を行ったことについて多くの研究がなされてきた。それらは主として、男女の平等な行動をいち早く認知させた先駆性に注目してきた<sup>(8)</sup>。

それに対し、フィリス・マックは、初期クエーカーと、それより少し早い時期から各セクトの内部や周辺で活動していた女性預言者／説教者たちの言動を、近代的な自己意識や平等な立場の要求などの価値観からではなく、当時の人々の自己の感覚、意識においてとらえようとする。

預言者としての女性たちは、実際には、彼女たちの人生で知り得た世界観の枠内での公的な権威を経験したのである。彼女たちのなかには、その権威をもって、自身の著作を書き出版したり、女性だけの会合を催したり、あるいは男性リーダーのもつより大きな権威に挑戦したりした者もいた。しかし、そうした幻視家の女性たちは自己主張をするための戦略を密かに企みそれを追求していたという推定は、17世紀の宗教家たちの主体的活動におけるリアリティをとらえてはいないのである。スピリチュアル・リーダーとしての女性の権威を支えていたものは、完全なる自己超越 (complete self-transcendence) の達成であった。それは、近代的な社会活動家やキャリア女性たちのそれとは全く異なる主観的経験である。このことは、預言者としての女性はパーソナルな野心を持っていなかったということを示しているのではない。彼女たちは、自己の感覚やパーソナルな成功の意味について、近代とは全く異なった、より複雑な概念を有していたということである<sup>(9)</sup>。

女性たちは、各セクトの思想に共鳴し、プライベートに、あるいはセクトが後援するシチュエーションにおいて説教活動を行った。彼女たちについての研究は、従来大きくは二つの視点から整理されてきた。第一に、男性聖職者や平信徒と共に、空位期における革新主義の先鋒として、貴族文化の打倒と、アングロ・サクソン・プロテスタントの中流ブルジョワジーの倫理——勤勉、礼儀正しさなど——に対する反逆を達成しようとした、という理解である。そして、議会と各教派の闘争や妥協のなかで、覇権を掌握していくことになる長老派聖職者と彼らと手を結ぶプロテクター政権によって、攻撃され後退を余儀なくされたという<sup>(10)</sup>。そして第二に、先に触れた男性聖職者に伍して彼らと同等に説教を行い、社会的発言を厭わなかったことに注目したものである<sup>(11)</sup>。しかしながら、後者の分析が、女性たちは実質的な平等性を勝ち取ることはできず、自律的主体的自己の意識は限られたものであったという、現代的価値観からの評価に陥ってしまうことは、そのような問題意識と歴史観による分析からすると当然のものであった。

マックによる研究は、そのような分析への問い直しに始まる。女性説教者たちは、神から預けられたヴィジョンや言葉の伝道者、スピリチュアルな領域における導き手として存在していた。先述のように、17世紀半ばにおいて、セクトによりその活動を支える信仰のあり方、それを実行する際のスタンスなどは異なるものの、ほぼイングランドという国家が千年王国として神によって新しく創造されるはずであるという集団的な幻想は共有されていた。千年王国の到来の時期や過程、「ダニエル書」を中心とする旧約聖書の預言文書、「ヨハネの黙示録」、あるいは他の聖書の叙述が、いかに現在の（当時の）イングランドの情勢を語るものであるかについて、あるいは直接的に神の言葉を体感し得る特別な能力をもつ者として、セクトの説教者たちは語り続けていたのである。従って、彼（女）らの語りは、千年王国としての新しいイングランド王国の到来を告げる神の言葉を視た／感じたものの吐露であり、主体的自己による主張などではなかった<sup>(12)</sup>。

初期のクエーカーたちは、ラディカルでありデモクラティックであった。しかしそれは、彼らが女性たちを協力者あるいは「イスラエルの母」としての特異な能力を高く評価していたからだけではない。男性と女性の特質（attributes）が、流動的かつ代替可能なもの（fluid and interchangeable）であると捉えていたことに理由があるのである<sup>(13)</sup>。

この男女の可変性、流動性を支えていたのは、当時の多くの人々が共有していたコスモロジカルな世界観であるといえる。

T.ラカーの研究は、このような近代初期のコスモロジーにおける性差の観念について、重要な視野を提供している。それは、男女は変わりうるものであり、その境界は曖昧であるというものである。明白なのは、より男性のほうが、より優れ完全に近いものであり、より女性のほうがより劣り不完全なものだという階層的・段階的・連続的な差異である。しかし、いつでもその境界の越境は可能であり、つまりひとつの性、ラカーのいう「ワンセックスモデル」なのである。

中世から近代初期の人々の世界観が、人体（マイクロコスモス）と、大いなる外部世界（マクロコ

スモス)は、宇宙の秩序(コスモス)においてアレゴリカルな照応関係にあるというものだったことは、これまでも指摘されてきたことである。ラカーは、そのコスモロジーにおける性差の観念が、18世紀以降の解剖学的・生物学的な身体における性差決定観と全く異なることを指摘したのである<sup>(14)</sup>。

聖母マリアのイメージ、イエスの出産、神の言葉(神のミルク)の授乳という象徴が、必ずしも女性と重ねられたわけではないことも、この時代の性差の区別の象徴的な曖昧性を示唆している。マックによれば、近代初期において、むしろ男性聖職者が、権威ある母のイメージに寄り添いながら、自己イメージを語ることも少なくなかった。そして、現代の感覚からすると奇妙なことではあるが、女性がそうした神聖な母のイメージに自己を重ねることは少なかった。彼女たちは逆に女性預言者/説教者たちは、ダニエルやイザヤなどの聖書に登場する男性預言者に自らを投影しつつ、またそのものとして語るが多かったのである<sup>(15)</sup>。

本論3章、4章で注目するパンフレットでは、そうした女性の説教行為がいかにかに神の掟を冒瀆し、人々を幻惑させる恐ろしい存在であるか、神の下で不当なる存在であるかが、躍起になって語られる。しかし一方で、彼らの非難がエキセントリックであればあるほど、多くの人々がこの転覆された世界、神による秩序の攪乱という夢を共有し、女性たちの説教を喜んで受け入れていたことを証左しているといえよう。

マックの研究は、男女の可変性、身体の流動性に注目しているものの、あくまで、女性預言者、説教者たちの宗教的自己意識、主体的経験の、現代の女性との質的な相違に重点がおかれる。それゆえに、政治的な抵抗運動と不可分であった当時の宗教的革新主義者として、男性とは違って積極的活動として結実しなかった、真の指導権を掌握することはできなかったという評価に終わってしまう。

本論は、女性の立場や地位、主体性の男性との比較に依る、あるいは現代的視点からの程度ではなく、説教や預言で人々を導く、すなわち教えるという役割を女性が担うことに対する非難の言葉を精査することによって、近代初期のイングランドの人々の女性観、教育と女性の関係の捉え方とともに、女性説教者の活躍を前に動揺する、コスモロジーのありようを照らし出したい。

## 2. トマソン・トラクト・コレクションにおける女性

書籍商、あるいは出版業者として知られるジョージ・トマソン収集によるトラクト(小冊子類)コレクション<sup>(16)</sup>には、1640年から1661年の混乱期に出回ったパンフレットや書籍類、あるいはこの時期に誕生した新聞などが数多く収められている。22,000点を超える印刷物が、発行年月日順の著者、タイトル別のインデックスを付与され、整理されたトラクト群が、ブリティッシュ・ライブラリーに所蔵されている。

ここでは、トマソン・コレクションのカタログの索引で、「女性(Woman)」の項目におさめられている32点の小冊子に注目してみる。このコレクション自体この時期の印刷物の全てを網羅している訳ではなく、しかも索引分類では限界はあるけれども、1640年から1661年という、出版物への検

関規制の狭間の時期に沸いた言論空間のなかで、女性はどうのような存在として話題にされたのか、を垣間見ることはできるだろう。

この32点の小冊子は、そのタイトルから、大まかに四つのカテゴリーに区分できる。第一に、女性による議会への請願類である。7点がタイトルに女性から議会への「請願 (petition)」と明示されている。さらに、「抗議 (remonstrance)」あるいは「不満 (complaint)」 「悲嘆 (lamentation)」 という言葉が使われているものが1点ずつある。職人層の妻や、寡婦、未婚の女性たち、あるいは女中奉公人たちが、議会に対して自由取引 (free trade) への参入許可、あるいは戦争中止の請願を出しているのである。第二に、「女性議会 (the Parliament of Women, the Parliament of Ladies, the Ladies Parliament)」に対する風刺または論評であり、7点ある。また、関連するものとして、女性が主張している女性のための新しい法 (the Women's New Law) に関するもの (おそらく風刺) が1点ある。第三に、女性に対してあるべき姿を忠告、勧告する助言書類であり、11点ある。「意志 (will)」や「高慢 (pride)」といった言葉によって女性への非難を表明しつつ、女性の「義務 (duties)」を論じている。第四に、3章、4章で検討する女性説教者に対するものであり、2点ある。さらに、白魔術師 (white divels) と思われる女性の発見についての論考が1点ある<sup>(17)</sup>。

ここで確認できるのは、請願書の数々にしろ、風刺に晒された「女性議会」にしろ、職人層、奉公人層の女性たちが、権威に対して自分たちの意見を表明していたことである。抗議や請願の意見を述べるだけでなく、「女性議会」と称する集会において組織的な運動を展開していたのである。「ひっくり返った世界」は、女性たちにとっても実現可能なリアリティあるものとして存在していたのであろう<sup>(18)</sup>。

職人の妻たちが商売の自由を要求し、戦争反対を主張し、女中たちが自分たちの余暇時間確保を要求しつつあるなかで、それらはもちろん歓迎されなかったであろうが、女性説教者たちは、人々に神のビジョンを説いたのである。彼女たちの行動に危機感、疑問を抱き、出版されたのが、『6人の女性説教者の発見』(1641)と『女性説教者における霊の動き』(1646もしくは1645)という2点のパンフレットである。以下、それぞれの議論を丹念に追うことにしよう。

### 3. 『6人の女性説教者の発見』(1641)にみる女性と説教

『6人の女性説教者の発見』(anon. *A DISCOVERIE of Six women preachers, in Middlesex, Kent, Cambridgshire, and Salisbury. With a relation of their names, matters, life and doctrine, pleasant to be read, but horrid to be judged of. Their Names are these. Anne Hempstall. Mary Bilbrow. Ionane Bauford. Susan May. Elizab. Bancroft. Anabella Thomas.* 1641.) は、本文5頁の短いパンフレットである。

まず、教会における女性の語りを禁じた「コリントの信徒への手紙」の一節を表紙に掲げる。

聖なる者たちのすべての教会でそうであるように、婦人たちは、教会では黙っていなさい。

婦人たちには語ることが許されてはいません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。婦人にとって教会のなかで発言するのは、恥ずべきことです<sup>(19)</sup>。

教会で発言してはいけない、神の道を説いてはいけないというこの文言が表紙に引用されていることからわかるように、このパンフレットは、一貫して、女性が説教をするという事態に対する批判として書かれている。

冒頭は、次のような文章から始まる。

古代の女性預言者 (Prophetesses) については読んだことがあるが、女性説教者 (women Preachers) などというものは、今まで私は聞いたことが無い。女性が説教をするのは、善良なる男性が不在で、有徳な女性はその代わりをつとめなければならないという場合のみである。彼女たちは、獣 (Beast) の言葉を解説しているだけであり、自分自身で説教をしているわけではなく、霊のようなものによって動かされている (such things as the spirit should move them) だけなので、何の効力もないのだ (1) [以下本章の引用後 ( ) 内の数字は、『6人の女性説教者の発見』における頁数]。

そして、題目に挙げられた6人の女性説教師たちの説教の様子を、見聞から、あるいは自分が、彼女らの集会に参加して経験した事実として述べていく。

最初のアナ・ヘンプスタルは、ロンドン郊外の教区で、自分の家で修道女たちの集会を催していたとされる。

愛すべき女性たちよ、昨夜私は奇妙な夢を見たのだ。しかも私が幻視 (vision) を視たのである。そこでは女性説教師アナが、私の視界に入り、顔を輝かせながら私をトランス状態に陥れ、そのまま私は次の朝まで倒れていた。私は、この夢の意味を解釈することはできないけれども、アナが、あなたや他の人々にも同じように説教をし、驚くべき状態に陥れたことを再現したのだらうと思う。冒瀆なるアナが叫び声をあげると、聖霊 (the Holy Ghost) があなたに襲いかかった。…女性 (アナ) の髪は彼女を引き立たせ、…アルコール (Aquavita) の瓶を口に含みながら、2時間あまりにわたって、猛烈な勢いで椅子の下を騒々しく踏みならしながら、人々の平和を祈り、(説教を) 終えた (2~3)。

ここでは、著者自身が女性説教師の力に服した夢が語られつつ、その恐怖を訴えている。次のメアリー・ビルブロウについては、次のように記述される。

メアリー・ビルブロウは、説教のあと、人々に、良く太った豚を食べ、さらにカップ一杯の

酒でそれを洗い流すように言った後、次の日の朝集まるように呼びかけたのである。彼らはそれに同意し、彼女に感謝し、エールを飲み交わしてその日は各々の家に戻った。次の日、彼らはメアリー・ビルブロウの家を集まった。彼女の夫は善良で正直な煉瓦職人である。彼らはすぐに居間に招き入れられ、椅子やクッションの代わりに煉瓦を与えられた。…彼女の説教壇は、煉瓦でとても高くしっかりと組み立てられ、メアリーが肩掛けマントを着て立ち、非常に深い心からの「祈り」を、準備もなく行った（3～4）。

平信徒の説教師を「桶-説教師」として揶揄していたのは有名であるが、ここでの説教壇は煉瓦である。共餐という契約の儀式がメアリーの説教壇への誘いであることは注目に値する。その後、ある紳士の来訪によって、メアリーの説教は中断させられることになる。というのは、この紳士は、「メアリーが契約の儀式に使用した豚が、ミドルセックスの女性教師たちが大事に育てていたものらしいという噂をもたらした」のである。

さらに、ジョン・バウフォードが教えていたケント州フィバーシャムでは、「捨てられた妻たちが、夫を交換していた」ことが報じられる。ケント州アシュフォードのスーザン・メアリーは、納屋で次のように説教をしていたという。「悪魔は法王の父であり、法王はサープリス（聖職服）を着る者たちの父である。ゆえに、悪魔はピューリタンを愛さない全ての者たちの父なのだ」。ケンブリッジシャーのエリザベス・バンククロフトは「日曜日に、法王が祭壇の上で贅にするだろう」と、ソールズベリーのアラベラ・トーマスは「近日中に、昼間は黒ワタリガラスが、そして夜は白フクロウが、聖職者たちの眼を掻き掘るであろう」と説教をしたことを報告している（本段落引用は（4））。

そして、次のように締めくくるのである。

女学者（female academy）にふさわしい大学（university）がどこにあるのか今述べることはできない。しかし、ベッドラム<sup>(20)</sup>やブライドウェル<sup>(21)</sup>が、彼女たちに相応しい場所ではないかと思う。そこではもちろん十分ではないが神の言葉が真に、そして心から説かれるであろう。…ただ、彼女たちは非常に野心に燃えており、非常に卓越性をもっているので説教壇の代わりに椅子や桶でまた説教を行うだろう。そうならないことを神に願うけれども…ここで私は6人について述べたが、間もないうちにもっと多くの女性説教師たちに関わるのではないかと恐れている。神よ、十分な理由もないけれども今回はこれで終わりにしたいと思う（5）。

ここにあるのは、単に女性が男性の領域を侵したことへの非難や、女性への蔑視だけではない。アナ・ヘンプスタル<sup>(22)</sup>の力で著者自身が恍惚状態に陥った夢に悩まされたことに言及しているように、彼女たちを動かしている聖霊の襲撃、豚やカラス、フクロウと悪魔との契約、酒の象徴といった超自然的な諸力の大きさの恐怖を、著者自身もまた同時体験していることがよく分かる。彼女たちの身体に取憑いた諸力の影響力におののき、畏れ、そのような力が蔓延することを避けるために、女



性は説教壇に立つてはならない、というのである<sup>(22)</sup>。

#### 4. 『女性説教者における霊の動き』(1646もしくは1645<sup>(23)</sup>) にみる女性と説教

『女性説教者における霊の動き:あるいはこの無礼で厚かましく奇妙な,新しい種族の女性たちに対する疑問:彼女たちが向こう見ずで無知,野心があり,しかも弱く,虚栄心がひどく,冒瀆にして高慢,過ちの霊によってのみ動かされているという点から』(anon. *A Spirit Moving in the Women-Preachers: or certaine quaeres vented and put forth unto this affronted brazen-faced, strange, new Feminine Brood. Wherein they are proved to be rash, ignorant, ambitious, weak, vaine-glorious, prophane and proud, moved onely by the spirit of error.*, Printed for Henry Shephard., Feb.23, 1646, 1645)も,表紙を入れて8頁の小冊子である。2頁半ほどの前書きのあとに,9つの疑問(quare)を提示し,そのあと3行の反論(Objection),そして2頁ほどの応答(Answer)がある。3で見た『6人の女性説教者の発見』がエピソード中心であったのに対して,こちらは,聖書のあれこれの箇所を典拠としたプロパガンダ,主張の展開であり,かなり細かい字でぎっしりと書かれている。

このパンフレットが,いかに女性説教者がひどい存在であるかということをも主張するものであることは,タイトルだけをみても明らかである。冒頭は次のように始まる。

こうした愚かで狂気に満ちた生き物に関わること自体を軽蔑すべきだし,その方が私にとっても良きことなのである。…しかし,誤った女性預言者は,あまりにその横柄かつ高慢,侮辱的な態度で,愚かで高慢かつひどい虚栄心をあからさまにし,男性の前に立ち,男性を凌いでいる。それは,自然(Nature),謙虚さ(Modesty),神性(Divinity),思慮分別(Discretion),そして礼儀正しさ(Civility)などの法則への違反行為である。そして,権威を征服し,法を愚弄するようなことであり,全てのことが,彼女たちの弱き由来に対立していることなのである。そうした彼女たちに対して理性的に立ち向かうことができる者はいないだろう。そこで私は,彼女たちにいくつかの疑問を提示することによって,その愚かさ,高慢さ,無分別さ,横柄さ,そして虚栄心の深さを見出すという道を選んだ。霊(the Spirit)が彼女たちを動かす通りに行動している(セクタリアンたちは皆そのつもりだろうが)のではなく,暗黒,無知,野卑で誤っている霊によって,突き動かされているのだ(2)[以下本章の引用後( )内の数字は,『女性説教者における霊の動き』における頁数]。

女性が,男性の前に立ち,男性を凌いだ行動をおこしているということ自体が,世界の秩序を犯すことであるというこの考え方は,近代初期のコスモロジーのなかでの性差の意識の一端を示しているといえよう。そして,さらにこの著者は,階層化された「ワンセックスモデル」の流動的で境界なく身体から意味があふれているような人間観を提示している。「暗黒,無知,野卑で誤っている霊

によって、突き動かされている」、つまり悪しき霊が、女性たちの身体を通り抜け浸透し、女性を動かす、また周辺へと浸みだして他へと影響を及ぼしていく。『6人の女性説教者の発見』の冒頭にもあったこの身体イメージは「弱き器」としてのキリスト教的身体観を支えるものである。

悪魔がまず女性を刺激し、弱き器 (weaker vessel) としての女性を誘惑し、女性によって、同じように全ての人間を刺激し、誘惑しようとしたとき、彼 (悪魔) は自分が稀な仲間と何を取引しなければならないかを知っていたのである。その仲間、すなわち女性は、本来的に (naturally) 全ての過ちに陥りやすく、彼 (悪魔) の陰謀や目的に適い、全ての創造物を混乱させ、可能な限りに、世界中を悲惨な荒廃に導くような存在である。樂園喪失後、いつの時代も、この愚かで弱い性 (this silly and weaker sex) を使って、彼 (悪魔) の大いなる陰謀と策略は成し遂げられてきたのである (2)。

「愚かで弱い性」という女性観は、中世から近代初期にかけて支配的であった<sup>(24)</sup>。女性自身も、この女性観を前提に行動していた。というのは、女性自身によって書かれた文章に必ずといっていいほどこの表現が書き込まれているからである<sup>(25)</sup>。この女性観は当時の多くの人々に共有されていた、もしくはそれに反するような意識や行動へのまなざしが非常に強いものであったといえることができる。

ここで重要なのは、女性が、「本質的、本来的に (naturally)」、全世界を荒廃に陥れるような「弱き器」であると考えられたことである。ここには、器官と機能によって特徴づけられるような解剖学的身体観はない。より女性のほうが、より悪魔の刺激に弱く、人々を悪へ導くような愚かさをより多く宿す存在であるという観方である。悪い霊という過剰な意味が女性の身体の皮膚の表面から浸透し、かつあふれでるような身体イメージを通して、男女の差異と、善悪や優劣、強いものと弱いもの、熱いものと冷たいもの、乾いた物と湿ったものといった世界の秩序を、呼応する関係としてとらえるような見方が、「ワンセックスモデル」における男女観であり、それを包み込むコスモロジーである。

では、1から9までの疑問の抜粋を列挙してみよう。

疑問1 何故、これらの愚かで弱い女性たちが、神の召命もなく、男女が混在する集会で説教という仕事に就き、手本となり、教訓を述べているのだろうか？聖書を見れば、女性が男性に語ることはまったくなく、男性によって教えられるか、沈黙しているかであるのに。…「テトスへの手紙2-3」にあるように、…年老いた女が教え諭すことできるのは、若い女性だけである。…

疑問2 「コリントの信徒への手紙 I 14-32<sup>(26)</sup>」の「預言者 (Prophet) に働きかける霊 (Spirits) は預言者 (Prophet) の意に服するはずです」(女性預言者 (Prophetess) ではない)にあるように、彼女たちは、このような偉大なる行動によって支配するような、正当や理由も正しい霊 (Spirit) も持ち合わせていないのに、何故彼女たちは、このような説教という偉大なる仕事に立ち入るので

あろうか？…

疑問3 「コリントの信徒への手紙Ⅰ 14-34, 35」に「婦人たちは、教会では黙っていなさい…」とある。いったいどのような思慮分別や慎ましき、羞恥心や厚かましきによって、彼女たちは傲慢かつ横柄にも宗教を裏切るようなことを敢えてするのか？つまり、教会のなかの分裂や誤謬を助長し、扇動したり、男女が混在した集会で教え説教すること (teach and preach) を引き受けたりするのだろうか？…

疑問4 「コリントの信徒への手紙Ⅰ 12-8, 9, 10」に「ある人には霊によって知恵の言葉、ある人には同じ霊によって信仰、ある人にはこの唯一の霊によって病気を癒す力、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています」とある。この霊は全ての男性において働くのであり、女性にはそのような才能は無い。霊の目的に反して、どのような権威や力によって女性説教師たちは説教という仕事をしているのか？…

疑問5 使徒パウロは、女性の才能を数え上げるなかで、当時の劣位 (inferior) な奉仕活動について指摘しているが、説教ということについてはまったく言及していない。「善い行いで評判の良い人でなければなりません。子供を育て上げたとか、旅人を親切にもてなしたとか、聖なるものたちをもてなしたとか、あらゆる善い業に励んだ者」<sup>(27)</sup> と述べてはいるが…。いったいどのような権威によって、こうした見苦しく自惚れた、向こう見ずで無分別な生き物 (creature) が男女が混在するような集会のなかで説教したり教えたりするのだろうか。それも、教会のなかの建物を使って。

疑問6 使徒パウロが「テモテへの手紙Ⅰ 5-22」に「性急に誰にも (no man) 手をおいてはいけません。他人の罪に加わってもなりません」と語る時、どこにも女性について語っていない。…それなのに、どんな権威によって、彼女たちは、ただ法に適った召命と聖職叙任を受けた聖職者のみに相応しい神の言葉を説教するというような聖なる仕事に立ち入ろうとするのか？

疑問7 「エフェソの使徒への手紙 4-11, 12, 13」に「そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教師、ある人を牧者、教師とされたのである。こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ついには私たちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです」とある。女性預言者は、この偉大なる聖職の仕事から除外、免除されているのである…。しかしどんな正当な理由や権威によって、使徒によって命じられている男性に向かって、敢えて教えたり説教をしたりするのだろうか？

疑問8 「テモテへの手紙Ⅰ 2-12」に「婦人は教えたり、男の上に立ったりするのを、私は許しません。むしろ静かにしているべきです」とある。…しかし、どんな権威によって彼女たちはあえて、あるいは大胆かつ厚かましく、そして侮辱的にかつ恥ずかしげもなく、集会のなかで男性の前で教えたり説教をしたりできるのだろうか？

疑問9 虚栄心の強い女性たちが別の方法で教えていようといまいと、我ら主なるイエス・キリ

ストの健全なる言葉に従っていようといまいと、そのような冒瀆的で不法な者たちをそのままにしておいてはならない。「テモテへの手紙 I 6-3,4」に「異なる教えを説き、わたしたちの主イエス・キリストの健全なる言葉にも、信心に基づく教えにも従わない者がいれば、その者は高慢で、何も分からず、議論や口論に病みつきのなっています」とあるように。そして、愚かな女性たちは、常に学ぼうとしているけれども、決して学んだことがなく、真実の知識に達することはできないのだ(4-6)。

以上全て、聖書の様々な書を典拠とした、女性が説教を行うことの(神の法に対する)違法性、冒瀆性の強調である。

そしてタイトルにあるように、このパンフレットの主目的は、セパラティストの「霊の動き」による女性による説教擁護論をどのように論駁するか、ということである。

しかし全てのセパラティストには、後ろ盾がいるのだ。彼女たちは霊(Spirit)が自分たちを動かす通りに行動している、という、彼らの理解に隠れている(6)。

そのために論者は、以下の三点について考察する。

1. キリストの権現以前の法の下での霊の運行
2. 父と子からの使命における、キリストによって任ぜられた霊の使命と役割
3. その(霊の)使命と派遣における、キリストによる霊の限界(7)

1については、旧約聖書の「神の霊が水の面を動いていた」(「創世記1-2」)や、「サムエル記上13-13」の「主の霊が激しくダビデに<sup>くだる</sup>降るようになった」、(「サムエル記上10-10」)の「神の霊が彼に激しく降り、サウルは彼らのただ中で預言する状態になった」、(「エゼキエル書11-5」)における「主の霊がわたしに降り、主は言われた。あなたは言わねばならない」などにより、「霊の様々な動き」を例示する。そして、デボラ(「土師記4-4」)やフルダ(「列王記下22-14」)という女性預言者(Prophetesses)の存在には言及しつつも、女性説教者(Women Preachers)については、全く論拠がないゆえに不当であることを確認する(7)。

2については、「ヨハネによる福音書」における以下の各箇所を指摘しつつ、女性の説教の不当性を論ずる。

この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にあるからである(ヨ:14-17)。

弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたに全てのこ

とを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる（ヨ：14-26）。

その方、すなわち真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである（ヨ：16-13）。

その方は私に栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである（ヨ：16-14）（7-8）。

さらに、キリスト降誕以降の「イエスの祝福された霊」が、「イザヤ書11-2」の「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」と同様であり、「霊は、キリストから…私たちを真実へと導くのであり、こうした愚かでひどいセクタリアーたちの夢や誤謬、作り話、そしてうわべだけの狂喜からではない」という（7-8）。

3については、2においても引用した「ヨハネによる福音書」の「霊は自分から語るのではない」けれども、「私に栄光を与える」という点に論及し、霊の役割を確認しながらも、都度それらの働きにおいて「下劣で愚かな女性」が神の遣いとなることは無いということを強調する。そして、最後に、「使徒言行録19-15」の「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何物だ？」という言葉掲げ、終わる。

ここには、神の霊の働き、そしてその命を受けての預言を、著者が非常に重要なものとしていることが現れている。そのような預言という重い役割に、女性に関わることの不当性、それへの忌避観が、聖書の様々な箇所が駆使され表明される。男性のみに許されている霊の交感、降霊が、女性には許されておらず、その上そうした力もない、にもかかわらず、それを行っている女性たちや、それを支えているセクタリアンに対する苛立ちや怒り、その非正統性が執拗に反復し力説されるのである。

## おわりに

空位期に、セクト活動のなかで現出した数々の女性説教者たちは、苦難を乗り越え、新しい国家がイエスによって打ち立てられるという夢－神の言葉－を人々に伝えることを自らの使命とし、諸処で説教活動を行っていた。

『6人の女性説教者の発見』からは、彼女たちの説教活動は、いわばソーサリーやカニングウーマン（マン）、すなわち、様々な生活上、人生上の知恵を魔術として授ける能力があるとして信じられていた人々の行為に酷似していることがわかる。大陸ほどに激烈ではなかったイングランドのウィッチクラフトが、神学的な悪魔観というよりも、社会関係や運命に対する人々の意識や感性の変化によるものであることは従来指摘されている。つまり、様々な不幸や災難が、超自然的な諸力によって支配され、それを操ることのできる魔術師の力に頼っている反面、徐々にそうした魔術によって作為的に自分たちの生活や人生を狂わせた存在に対して集団で攻撃するという感性が浮上し

てくるということである<sup>(28)</sup>。

女性説教者が、多くの支持者を得ていたのも、そして本論でみたような攻撃的とされていたのも、このような感性、つまり流動的かつ連続的な身体観、そしてそれを支えるコスモロジーが、当時の人々の生そのものを支配していたからであるということができる。

『女性説教者における霊の動き』は、聖書を根拠とした女性の説教への批判である。ただ、悪魔による弱き女性への陰謀、悪しき霊が女性を陥れ、その弱く湿った海綿状の身体から悪が浸みだしていくという身体観、女性観は、カニングウーマン、あるいは白魔術を信じる感性と近い。教会がこうした信仰体系を否定したわけではなく、「教会魔術」として人々の生活に入り込んでいたように、このようなコスモロジーとキリスト教は共存していたのである。

「ひっくり返った世界」という秩序転覆の夢は、千年王国思想という聖書の預言への信仰運動として燃え広がり、女性たちの積極的言動を促した。本論でみたパンフレットで批判されている女性説教師たちが、以前から存在していたカニングウーマンと異なることは、セクトであるとしても正統的なキリスト教会を名乗る教派の説教活動を担ったことであろう。男性セクタリアンたちは、まさに自分たちの思想と行動の象徴的存在として、彼女たちの活動を支えた。セクタリアンのなかでも急進的武闘派である第五王国派などは、男性たちの軍事活動（ニューモデル軍への貢献）の銃後を支え、あるいは当局からの直接的攻撃をかわすために、女性に期待していたことが指摘されている<sup>(29)</sup>。

ただ、彼女たちは、当時のコスモロジーにおける、霊をめぐる性差の浸透性、連続性、身体的な性差からの遊離感覚において、より高位の存在へと変移する使命を、神から降る霊によって感じ、視たことによって確信し、それを人々に伝えていた。

本論でみたような女性説教者への非難を論ずる議論の切迫性は、むしろ、そうした女性への霊の働きによって、コスモロジカルな秩序が攪乱されつつある事態への、畏れであり、恐怖であり、非難であったといえよう。

## 〔付記〕

この論文は、平成17-19年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究課題名「近代初期英米における「産み育てる身体」の成立過程に関する基礎研究：女性預言者を中心に」の一部である。

## 註

- (1) Travitsky, B. S., 'The New Mother of the English Renaissance: Her Writings on Motherhood', in Davidson, C. N., *The Lost Tradition: Mothers and Daughters in Literature*, Frederick Unger, 1980; Charlton, K., 'Mothers as Educators', *Women, Religion and Education in Early Modern England*, Routledge, 1999. トラヴィツスキーは、女性による著作の出現という文学史上の転換に注目し、17世紀イングランドで書かれたいくつもの女性による母の助言書上の母

親像を紹介するが、母親役割の歴史的変化については不明である。チャールトンは、17世紀における母親の教育役割として、宗教教育、とりわけて聖書を読むこと、祈ること、神聖なる神の世界の「完璧なる乳を与えること」であったことを明らかにしている。野々村淑子「近代初期英国の霊性と母親像の転回-D.レイ『母の祝福』(1616)を中心に-」(『九州大学大学院教育学研究紀要』第7号(通巻第50集), 2005年), 同「近代初期英国の身体観と母親像の転回-エラスムス『新しい母』英訳版を中心に-」(『教育基礎学研究』第2号, 九州大学教育基礎学研究会, 2005年)は、代表的な母親向けの助言書における女性と教育との関係構造、特に母親像に着目した(平成15-16年度科学研究費補助金 若手研究(B)「近代初期英国の女性と教育の関係構造に関する基礎研究:コンダクトブックを史料として」の一部)。前者において、母は子どもの来世の幸福を願い、信仰の重要性を伝えるという役割に徹し、霊性が支配する教育という営みの領域に踏み出すことはない。それに対して後者は、「産むこと、母乳を与えること、世話すること」という身体を通した母子関係の正当性と重要性を根拠に、母親役割を規定していく。この両者のずれは、近代初期の「自然」概念を中心とした世界観、身体観、コスモロジーのゆらぎと無関係ではない。

- (2) 空位期 (Interregnum) は、チャールズ I 世の処刑 (1649年) あるいは実質的支配権の喪失 (1646年) から、王政復古 (1660年)、つまりチャールズ II 世即位までをいう。Fritze, R.H. and Robinson, W.B. ed., *Historical Dictionary of Stuart England, 1603-1689*, Greenwood Press, 1996, pp.255-258
- (3) 17世紀英国圏における主要な都市とそれを結ぶ幹線道路が、図と解説によってわかりやすく示されているものとして、BRITANNIA, *Volume the First: or an ILLUSTRATION of the KINGDOM of ENGLAND and Dominion of Wales: by Geographical and Historical DESCRIPTION of the Principal Roads thereof. Actually Admeasured and Delineated in a Century of Whole-Sheet Copper Sculps. Accomodated With the Ichnography of the several Cities and Capital Towns, and Completed By an Accutate Account of the more Remarkable Passages of Antiquity Together with a Novel Discourse of the Present State, by John Ogilby Esq., His Majesty's Cosmographer, and Master of His Majesty's Revels in the KINGDOM of IRELAND*, London, Printed by the Author oat his House in White-Fryers.1675
- (4) Hill, C., *The World Turned Upside Down: Radical Ideas During the English Revolution*, First Published by Maurice Temple Smith, 1972. ヒルは、「イザヤ書24. 1-2」の「見よ、主は地を裸にして、荒廃させ、地の面を歪めて (turnth it(the earth) upside down) 住民を散らさせる」を冒頭に置いている。「イザヤ書」は、当時の千年王国思想を支える書として多く引用された。
- (5) C.ヒル『一七世紀イギリスの宗教と政治 クリストファー・ヒル評論集Ⅱ』小野功生訳、法政大学出版局、1991年、特に第13章「ユダヤ人の改宗するまで」(*The Collected Essays of CHRISTPHER HILL vol. II Religion and Politics in 17<sup>th</sup> Century England*, 1986)、田村秀夫編

著『イギリス革命と千年王国』同文館, 1990年。

- (6) 大西晴樹『イギリス革命のセクト運動』お茶の水書房, 1995年, 特に112頁。
- (7) Hill, C., *Op.cit.*, 1972
- (8) Bacon, M.H., *Mothers of Feminism: The Story of Quaker Women in America*, San Francisco, Harper and Row Publishers, 1986 ; クエーカー研究は, 伝記的なものも含め数多い。クエーカー以前の女性説教師については以下のものがあるが, やはり女性の独立性が主たるテーマである。Ludlow, D., "Arise and be doing" : *English 'Preaching' Women, 1640-1660*, Indiana University unpublished Ph.D thesis, 1978; Davies, S. *Unbridled Spirites : Women of the English Revolution: 1640-1660*, The Women's Press, 1998.
- (9) Mack, P., *Visionary Women: Ecstatic Prophecy in Seventeenth-Century England*, California UP, 1992, p.5. キース・トマスも, 彼女たちはスピリチュアルな平等性を要求したのであって, 後のフェミニズムへの直接的影響はなかったと指摘するが, 夫婦の従属関係と家族像を主題としている。Keith V. Thomas, 'Women and the Civil War Sects', *Past and Present*, No.13, 1958
- (10) Hill, C., *Op.cit.*, 1972, Capp, B.S., *The Fifth Monarchy Men: A Study in Seventeenth-Century English Millenarianism*, Faber and Faber, 1972. ヒルの革命論に関する最近の議論として, 岩井淳他編著『イギリス革命論の軌跡』蒼天社出版, 2005年。M.トルミー『ピューリタン革命の担い手たち-ロンドンの分離教会 1616-1649』大西晴樹他訳, ヨルダン社, 1983年 (Tolmie, *The Triumph of the Saints*, Cambridge UP, 1977)。
- (11) 注(8)を参照。
- (12) Burrage, C., 'Anna Trapnel's Prophecies', *The English Historical Review*, Vol.26, No.103, 1911; Dailey, B.L., 'The visitation of Sarah Wright: Holy Carnival and the Revolution of the Saints in Civil War London', *Church History*, Vol.55, 1986, Cope, E.S.ed., *Prophetic Writings of Lady Eleanor Davies*, Oxford UP, 1995, etc. セクタリアンの女性たちの著述アンソロジーは多数ある。
- (13) 「初期の」という限定は重要である。というのは, その後の展開のなかでそのラディカルさとデモクラティックな特性を徐々に失わせていくからである。クエーカーは, 現代に至るまで存続した, この時期に誕生したセクトのなかでは異例な教派である。それは, このような変質過程を通してであったことはよく指摘されている (Mack, *Op.cit.* p.9)。
- (14) トマス・ラカー『セックスの発明-性差の観念史と解剖学のアポリア』工作舎, 1998年 (Laqueur, T., *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*, 1990)
- (15) Mack, *Op.cit.* pp.18-24, 106-119.
- (16) ブリティッシュ・ライブラリーの所蔵コレクション。手稿の詳細な目録もブリティッシュ・ライブラリーに所蔵されている。20世紀の研究者によるリプリント版が出版されている。*Catalogue of the Pamphlets, Books, Newspapers, and Manuscripts Relating to the Civil War, the Commonwealth, and Restoration, Collected by George Thomason, 1640-1661*, by G.K.



Fortescue, London, 1908; reprinted Ann Arbor, 1977

- (17) Index., *Ibid.*
- (18) レヴェラーズの指導者リルバーン夫人や、チドレー夫人ら多くの女性が、議会に対して請願や意見を出していたことは指摘されている。トルミー, 前掲書。大西晴樹, 前掲書 (1995年), 特に123~149頁。
- (19) 「コリントの信徒への手紙 I 14.26-36」, 『聖書』新共同訳, 日本聖書協会, 1989年。本稿での聖書の訳は全てこれによる。
- (20) 矯正院 (House of Correction) と同義。16世紀から設立された貧民用の救貧・矯正施設であり, 下賜された王宮ブライドウェルを転用した施設が先駆であったため, 各地に設けられたものもブライドウェルと呼ばれた。浮浪者矯正収容所, 刑務所と区別することは難しい。『英米史辞典』研究社, 2000年。乳原孝『エリザベス時代の犯罪者たち—ロンドン・ブライドウェル矯正院の記録から』嵯峨野書院, 1998年。
- (21) ベドラム, ベツレヘム精神病院 (Bedlam)。ロンドンにあったイギリス最初の精神病院。『英米史辞典』(同上書)。この著者の言葉が現実的であったのは, 17世紀初頭の上層階層出身の女性預言者ディビスが, ベドラムに入院を余儀なくされたことから分かる。Cope, *Op.cit.*, 1995
- (22) 17世紀イングランドにおける, 超自然的な諸力, 魔術から神の摂理へ, という世界観, コスモロジーの変容については, キース・トマス『宗教と魔術の衰退』法政大学出版社, 1993年(原著, 1971年)。人々の日常生活が, このコスモロジーにおいて営まれていたことについては, Capp, B., *Astrology & the Popular Press: English Almanacs 1500-1800*, Faber and Faber, 1979
- (23) 1646と印刷されているが, 6が斜線で消されて5に訂正されている。
- (24) Fraser, A., *The Weaker Vessel: Woman's Lot in Seventeenth-Century England*, Arrow Books, 1984
- (25) Travitsky, *Op.cit.*, 1980. 野々村淑子, 前掲論文, 2005年。もちろん, 彼女たちがそれを受け入れていたかどうかは別問題である。
- (26) 史料には, 14-22とあるが, 14-32の誤りである。
- (27) 「テモテへの手紙 I 5-10」
- (28) キース・トマス, 前掲書, 1993年。
- (29) Cary, M., *The Resurrection The Witnesses; and England's Fall from (the mystical Babylon) Rome* ... 1648. 特に第五王国派男性活動家による前書き。Burrage, C., 'The Fifth Monarchy Insurrections', *The English Historical Review*, Vol.25, No.100, 1910; Capp, B.S. *The Fifth Monarchy Men: A Study in Seventeenth-Century English Millenarianism*, Faber and Faber, 1972

**Women's Preaching and Subversion of Cosmology in 17<sup>th</sup> Century England :  
Two Pamphlets attacking on Women Preachers**

**Toshiko NONOMURA**

In the Interregnum England, many women preachers appeared among the radical sectarian movement. They were preached on the tub or bricks, like men sectarians. This paper shows the Cosmology and the idea of sex difference in the pamphlets attacks on the women preachers.

As T. Laqueur says, 'One Sex Model' was dominant in the early modern Europe. 'One Sex Model', the fluid and interchangeable body image, was connected with Cosmology- Micro-Cosmos (human body) corresponded to Macro-Cosmos (the World), according to Cosmos God created--.

This model is completely different from our modern 'Two Sex Model', based on the idea of body in modern anatomy, biology and medical science.

In Thomason Tracts, there were many women's petitions or remonstrances. And we can see the word 'Women's or Ladie's Parliament'. It clears that many women expressed their will and opinion in 'the world turned upside down' (C.Hill).

*A DISCOVERIE of Six women preachers (anon.)* showed author's experience and observation about women's spiritual leadership with the help of supernatural powers. People would have both the fear and the respect of the women preachers. In *A Spirit Moving in the Women-Preachers (anon.)*, the author exhaustively criticized the women preachers in sects by citation of the Bible.

These attacks on women preachers based on the early modern Cosmology and Spirituality. The moving of spirit was the most important in both tracts. But their strong tensional discourse suggests the fear about subversion or disturbance of the static order relating to sex, included in the Cosmology. Women were considered 'the weaker sex (vessel)' and this idea held the Cosmological order of men and women. Everyone was to be in the 'proper place' in order for the God's Cosmos. But the dream of Millenarianism and 'the world turned upside down' in the Interregnum, supported by ordinaries, gave many women the power of preaching or teaching to people. Their conduct would be impossible in the order (the Cosmos) in the period. Women preachers disappeared in 1660s, as sectarian movement had died down.